

また一方、彼女ら三人の物事に対する解釈が多くの人に受入れられるからこそ彼女たちの本が売れるのだと思うが、そのわりに世間ではそれに伴った行動が見られないところが、現代の若者の消極性を顕示しているということもできるかもしれない。(葱)

町へ出よ、キスをしよう

驚沢 萌著
新潮文庫 三五〇円

驚沢萌の第一エッセー集。不勉強にして、評者は著者が今をときめく流行作家であることはおろか、彼女の名前さえ、この本で初めて知った次第である。

八七年、一八才にして文学界新人賞を受賞。芥川賞、三島賞など数多くの賞にノミネートされ、九二年には泉鏡花賞受賞という輝かしい経歴の持ち主の彼女であるが、その文章は「すごい」の一言に尽きる。これが、二〇になるか、ならないかという人の書くものとは思えない。

最初の一編を立ち読みした瞬間に、体の奥底から湧き上がる興奮を感じた。リズムが小気味良い。フィリングが合う。まさに、エイティーズ(著者は僕らの世代のことをこう読んでる。)の文章である。おしゃれなバーできれいな女の子と話しているような雰囲気、すっごく楽しい。文章のそこら中に、ノスタルジックな雰囲気漂っているのがまた良い。彼女の文章に一目惚れしてしまったよである。(波)

軽いつづら

丸谷 才一著
新潮社 一三一〇円

やはり丸谷才一は丸谷才一だけのことはある。読んでよかったと思える、短いエッセイ集である。

第一に、テーマの選び方がよい。

第二に、そのテーマについて論じる際の目のつけどころがよい。

第三に、引き合いに出す例や解説を加える際に使う資料が面白い。思いもかけないところから、思いもかけない人の発言を引っ張ってきていることもある。それは博識さ故かもしれないが、同時にのごとの面白味を見いだす力あっての故でもあるだろう。

第四に、つけるコメントがなかなか辛口でしかも押さえるところを押さえている。井上馨もカーター元大統領もかたなしである。しかし大谷崎を説明するためには只の谷崎と言われた谷崎精二さんは少し気の毒な気もする。

そして何より、言葉に対する感覚が優れているせいか、引き合いに出すコメントも優れた表現力によるものが多く、また著者自身の言葉の選び方もなかなかである。やっぱ人間たる者、欲張らずに軽そうにみえる宝の箱を選ぶとよいのかもしれない。中には、意外とぎっしりすてきなものが詰まっている。(零)

書評

『愁月記』『おらんだ帽子』

三浦哲郎と言えば、「忍ぶ川」「春は夜汽車の窓から」などの義務教育国語教科書的な作品を挙げるまでもなく、短篇の名手としてその名は知れ渡っている。この冬に刊行された二冊の文庫短篇集『愁月記』『おらんだ帽子』には、九十一歳で遂に息を引き取った母親の肖像を中心のモチーフとして、自分や家族や友人たちの生活が、静かに、細やかに、力強く描かれており、彼の真骨頂が遺憾なく発揮されている。「白夜を旅する人々」で滅びゆく兄妹たちの生涯を描き切った筆者の自信のようなものさえ感じられる作品群である。

三浦哲郎の作品に流れるテーマはいつも『生と死』であり、しかもそれらがデカップルしていることはない。常にその二つが交錯し、共存し、格闘しており、それに翻弄されつつも健気に必死に生きる人々の様子が『私』の生活という低い視点から生々しく描かれている。私小説否定の風潮が長い間続き、無意味なイデオロギーと無益な情報の氾濫に埋もれていた日本の土壌の中で、三浦哲郎の文章は、決して大袈裟ではないが、何者にも捉われず読む者を自ずから虚心にさせ、せわしない世の中で思わず立ち止まりたくなるオアシスのような位置を占めている。

もちろん彼がこの境地に達するまでには、これまでの作品にいやというほど描かれてきた兄妹たちの自殺や失踪、両親の死、赤貧に喘いだ青春時代など、幾多の困難を乗り越えて来たのであるのだが、その苦難を仰々しく表に出したりせず、静謐な文体で心の奥から切り出して書き上げる彼の短篇は、読む者の心にある種の安らぎと落ち着きを醸し出さずにはいられない。彼は、安らぎと落ち着きが単に生からのみ付与されるものではないことをよく知っているのだ。単なる「生」はとりとめもなく浮遊し、根生いもなしにこの世を動き回るだけであり、人々を落ち着かせることはない。生と死は対局にあるものではなく、死は生に含まれ、生は死を作り出す。人生の安定と落ち着きは、生と死が深く噛み合った実存の相から静かに溢れ出、流れ出して来るものであるということ、三浦哲郎は言葉という形式を借りて我々に伝えようとしている。

この二冊の短篇集で彼が描いた母の晩年と死、兄妹たちの運命と終焉、そしてそれらを作品として表現する立場に立った筆者自身の生活とその危機の様子は、いずれも人間というものが生によって生き、同時に死によっても生きていくという紛れもない事実を暗黙のうちに我々に伝えようとしており、その企ては見事に成功しているように思える。「一匹の鮎のような短篇を書きたい」という三浦哲郎の文章には、そのような不思議な力が宿っているのである。

(地球惑星物理学教室 伊藤孝士)